

ケイ・シャトルワースの『マンチ  
エスターの木綿工業で働く労働階  
級の道徳的、身体的状態』(一八三  
二)について

遠藤 幸 孝

一九世紀のイギリスにおける公衆衛生運動の胎生期から  
発展期への転換点というべき一八三二年に公刊されたケ  
イ・シャトルワース(Sir James Phillips Kay-Shuttleworth, 1804-  
77) の "The Moral and Physical Condition of the Wor-  
king Classes Employed in the Cotton Manufacture in Man-  
chester" については、産業革命の進展に伴い木綿工業の中  
心となった大工業都市マンチェスターの社会的病弊とその  
根本的対策を提示し、後の公衆衛生の発展に大きな影響を  
与えた「先駆的報告」として紹介されている。

しかし、その内容については、イギリス教育史の分野

で、イギリスの公教育制度の創始者としてのケイ・シャ  
トルワースの教育活動と思想との関連で、この小冊子の中  
で展開されている彼の貧民層に対する教育問題についての考  
え方が研究され、紹介されているほかは、殆ど紹介されて  
いない。また、彼の生涯についても、マンチェスターを離  
れた一八三五年以後の救貧法補助委員、枢密院教育委員会  
のセクレタリーなど教育分野の活動を中心に紹介されてい  
るが、早期の特に医師としての活動は殆ど紹介されていな  
い。

今回は、この小冊子(増補第二版)の紹介をかねて、一九  
世紀のイギリスにおける公衆衛生の歴史の中での役割、意  
義を明らかにする観点から、いくつかの特徴について報告  
する。

この小冊子に述べられている諸事実は、(1)一八三一〜三  
二年のコレラの侵入に備えて設置されたマンチェスターの  
保健委員会が行った、住居および街路の状態に関する詳細  
な調査、(2)病院、警察、教区委員事務所、裁判所などの公  
的機関の統計を中心とした資料、(3)医学専門雑誌などの出  
版物からの引用、(4)教区委員や病院医師などの専門家から

の個人的情報、(5)彼自身の診療活動や保健委員会の活動の中で、彼の観察、から構成されている。これらの情報の中で、彼が特に重視しているのは統計的調査研究資料で、当時のイギリスでは統計が軽視され、問題が発生して特別の調査が必要となると、議会に設置される委員会での審議という方式によって情報収集が行われており、このような方式では民衆を納得させることができないと厳しく批判している。

このような立場から、この小冊子には、付録も含めて合計一五の統計表が諸事実とその説明を裏付ける資料として採録されている。その内訳は、本文関係では、(1)住民の居住環境に関するもの四表、(2)貧民救済の実状に関するもの五表、(3)犯罪の発生状況に関するもの二表、(4)マンチェスターおよび周辺地域の死亡状況の推移を示すもの一表、(5)チェスターのハイドにおける開明的慈善活動の効果を示すもの一表で、付録には本文の貧民救済に関する統計表の元になった詳しい統計表が二表加えられている。

これらの統計表の中で特に興味を引くのは、居住環境に関するものの中の街路と住居の状態を示す二表である。こ

の二表は、保健委員会が行った調査結果をまとめたもので、貧民の密集居住地区の環境の劣悪さが見事に浮彫にされている。この調査は、地区保健委員会が設置された各警察管轄地区が更に細分割され、それぞれの地域にその地域の住民の中から人望のある人が二人ないしそれ以上検査人として任命され、これら検査人により、あらかじめ作成された調査表(付録に採録されている)に基づいて行われた。

こうした点で、この調査結果はかなり正確なものであったことが強調されている。コレラの侵入という緊急事態の中で行われたこの調査は、その内容や調査方法からみて、貧民層の劣悪な居住環境の状態を客観的に把握し、それらの改善策を立案するための社会調査として、当時の環境衛生を中心とする公衆衛生運動の中でも極めてすぐれた、ユニークなものであったといえよう。そしてこの間、彼は保健委員会のセクレタリーをつとめており、この調査においても指導的役割を果たしたものと考えられる。また、この小冊子の公刊がきっかけとなってマンチェスター統計協会が組織された(一八三三)。これはイギリスにおける同種組織の先駆となったものである。

貧民層のおかれた状態と問題点を、単に個人的観察だけではなく、こうした調査結果を含めた統計的資料によって明らかにしたことが、この小冊子を一層説得的なものにし、特に社会問題に関心をもつ人々にひろく読まれ、各方面に多大な影響を及ぼす大きな要因となったのではないかと思われる。

(東京大学医学部保健学科成人保健学教室)

## 伊藤鳳山の医説をめぐって

荒木 ひろし

伊藤鳳山(諱は馨、字は子徳、鳳山は号。一八〇六—一八七〇)は、『治痢功微篇』の著者・伊藤鹿鳴(名は孔昭)を父として出羽国(山形県)酒田に生まれ、生涯、儒(経学)を講じ、あるいは医経の考証を行い、「儒医」として一家をなした。安政四年(一八五七)に信甲越漫遊の途に上ったのち、元治元年(一八六四)田原藩に入り成章館の講師として儒学を講じ、その地に崩じた。死去にあたって群弟子から明経先生と諡され、幕末田原藩の三山の一に称せられたという。三山とは渡辺華山、鈴木春山と鳳山の三者をいうのである。

ところで、鳳山の生涯を詳細に追い『鳳山伊藤馨』を著わしたのは阿部正巳氏であるが、さらに安西安周氏は『日本儒医研究』(第二十四章)において、安部氏の研究をふまえて、鳳山の医説を摘録して懇切な記述をのこしている。こ